
20世紀イタリアのパン屋さん（短編）

蝉ノ河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

20世紀イタリアのパン屋さん（短編）

【著者名】

NZマーク

蝉ノ河

【あらすじ】

1930年代イタリア。

激動の第二次大戦をして生まれた、普通のパン屋さんによる、普通のパン屋さんの物語。

(前書き)

この小説は2010年春にひらかれた『職業小説企画』に寄稿した作品です。企画テーマは、職業をメインに据えた小説です。

義務を果たすことに忠実であるべし。

街のパン屋の息子だったわたしは、与えられた義務を忠実に果たしていた。

幼いうちには学校にも行つたが、やがてパン屋の手伝いのために行くことをやめた。

毎日、毎日、忠実にパンを焼く。小麦粉をこね、寝かしてイースト菌を醸酵させ、オーブンに入れて焼く。

つまらない毎日だとかつての同級生に笑われたが、わたしには何がどうつまらないのかがわからなかつた。

義務を果たすことに充実した毎日だ。

わたしが焼いたパンが一万個を超えた時、流行の病で両親が死んだ。

わたしは若すぎるパン屋として、一人前にならざるを得なくなつた。

それからわたしは一人前のパン屋が果たすべき義務を、忠実にこなした。

毎日、同じ味のパンを、同じ時間に開店した店で、同じ街の人々に届ける。

それがわたしの仕事であった。

わたしが焼いたパンが十万個を越えたあたりの頃、戦争になつた。

後に言つ第一次エチオピア戦争だ。

わたしはムッソリーニ首相の演説に好感は持てなかつたが、国民の義務としてイタリア王国軍に入らねばならなかつた。

しかしパン屋を廃業することは出来ない。

廃業すればこの区域の人々は、隣の地区までパンを買いに行かねばならなくなる。

わたしは妹に言つた。

「果たさねばならない義務が二つある。片方の義務を果たすと、もう片方が果たせない」

「大変ですね」

妹はそつけなかつた。

だがそつけない妹はその日のうちに学校を休学して、白いパン屋の作業服を着た。

わたしは妹と心が通い合つた喜びに溢れ、一通りの技術を妹に伝授すると、祖国のためにイタリア王国軍に入った。

パンを焼く手に銃を持ち、わたしはエチオピア軍と戦った。

兵士という職業には慣れそつもなかつたが、上官はわたしを高く評価した。

「君は素晴らしいな。パン屋では銃の撃ち方も覚えるのか？」

「義務を果たしているだけです」

「その義務を果たせない者が、我が国には多すぎるのだ！」

上官は一兵卒としての徴兵義務を終えたわたしを、軍に引きとめようとした。

「パンなんて、他の者に焼かせればいいだろ？ 我がイタリア王国には、君のような勇者が必要なのだ」

「上官閣下。わたしの家も、街も、パン屋のわたしを必要とします」

わたしは軍服を脱ぎ、再びパン屋に戻った。

「ただいま」

「お帰り」

妹とのそつけない挨拶であった。

感動的な、フランス人好みの抱擁は、わたしも妹も苦手だ。

妹の焼くパンは熟練の域に達していた。

街の人々も、妹のパンを必要としている様子であった。

わたしはここに必要ないかもしれない。

「妹よ。お前はパン屋を続けたいか?」

「お兄様は、パン屋に戻りたいの?」

妹に言われて、わたしは愕然とした。

なんということだ。兄であるわたしが、妹に家業を任せて家長としての義務を怠るとは!

わたしは直ちにパン屋に戻り、妹に好きに生きていこうとを告げた。

妹は学生に戻り、驚異的な成績で一族誰もなしえなかつたマトウリタ（高校卒業資格試験）をパスした。

妹の言葉はパン屋のわたしには難しすぎたが、やがてパンも人が焼く時代ではなくなるそうだ。

「じゃあパン屋はどうなる?」

「機械以下のパン屋は消えて、機械以上のパン屋が残るの。企業が資本家から金を集めて機械を作り……」

妹は天才かもしれない。

その天才が、イギリスにあるオックスフォードという学校への進学を希望した。

わたしは知らなかつたが、たいそう歴史があるそつだ。

出来れば祖國の由緒あるボローニャ大学に行つてほしかつたが、妹の希望は曲がらない。

妹には夢があるのだろう。わたしに義務があるように。

かつて妹に助けてもらつたのだから、今度はわたしが妹を助ける番だ。

わたしは生活を切り詰め、パンを焼く量を増やし、ほんの少しだけパンを値上げして、妹の留学費用を工面した。

「ありがとう、お兄様」

「気にするな」

妹はそつけない言葉で礼を言ったが、妹がわたしに心の底から感謝していることは、わたしも知っていた。

わたしの焼いたパンが百万個を超過した頃、また戦争になつた。

前回の戦争とは比較にならないの程の、大規模な戦争であつた。

後に言つ、第一次世界大戦だ。

わたしは一度目の従軍を嫌がつたが、時のイタリア王国軍はわたしの個人的な徴兵拒否を受け付けてはくれなかつた。

わたしは再度、軍隊に入つた。

妹はイギリスに留学中であり、しかも留学先のイギリスは連合軍に属し、枢軸国のイタリア王国とは敵国であつた。そんな状況でまさか妹を呼ぶわけにもいかず、パン屋は廃業となつた。

兵士になつてしまふすると、以前わたしを軍へ引き止めてくれた上官と出会つた。

上官は見事に栄達を果たしており、今では軍の参謀本部にいた。

「お前は選択を誤つたぞ。あの時、軍に留まつていれば、わたしの部下として上層部にいれたろう」

「そうですか」

わたしは一兵卒として従軍した。

階級が最低のわたしが言つのは何だが、我がイタリア王国軍は非常に弱かつた。

わたしもまた、守るべきパン屋をなくして、やる気を喪失していた。

果たすべき義務が見つからなかつた。

エチオピア戦争の時も思つたが、祖国を守る戦いでなぜアフリカ

まで来て戦わねばならないのか？

ムッソリーニ首相の爽やかな演説にも、その答えはなかった。

妹ならばわかつたかもしれないが、わたしにはわからなかつた。

義務感を喪失したわたしは、自分でも驚くほど脆く、エジプトでイギリス軍の捕虜となつた。

捕虜生活は辛くはなかつたが、何も出来ないことが辛かつた。

数年後、戦争は終わり、わたしは故郷に戻つた。

祖国イタリアは壮絶な負け戦であつたが、奇跡的に故郷の街に戦火は及んでいなかつた。

しかし度重なる徴用で街は荒廃していた。

しばらく街をぼんやり見ていると、街の人人が集まってきた。

なぜただの帰国兵に過ぎない自分の周りに人だかりができるのかと不思議に思つていると、初老の男がわたしに話しかけた。

「なあ、あんた」

「なにか？」

「パン屋はいつ開店するんだい？」

皺だらけのくたびれた男の言葉を聞き、わたしの体に電撃が走つ

た。

わたしは果たすべき義務を、一刻も早く果たさねばならない。

「一ヶ月、いや一週間後には必ず」

わたしは大急ぎで家に戻り、道具をそろえ、貯金を叩いて闇市で小麦粉を仕入れ、なんとかパン屋を再開した。

その時のことは、わたしの脳裏に深く刻まれている。

街にパン屋が開店した。

ただそれだけのことで、人が群集となつて押し寄せた。

むやみに拍手をする人や、大声を上げる人、涙を流している人もいた。

「ああ、戦争が始まる前の、そのままだ」

十字架も何もないパン屋に、白髪の老婆が祈りを捧げるように頭を下げた。

老婆の田には、おそらくこのパン屋が、わたしが継ぐ以前の姿と重なっているのだろう。

わたしは忠実に義務をこなした。

やがてわたしは結婚し、子供を作った。

息子にもパンの焼き方を教えたが、彼がどんな義務を負うか、もしくは夢を追うかは彼だけが知っている。

わたしが焼いたパンが一千万個を大幅に超過した頃、わたしは体を壊して入院した。

だがその頃には、わたしが行つべき義務はもう何も残っていなかつた。

息子と、企業人となつた妹の助力で機械化が進み、パン屋はパン工場となつていた。

わたしが一週間かかつてやつと焼けるパンを、機械は一日で焼いてしまえる。とても勝負にならなかつた。

手焼きのパンは、片隅の釜で焼いているだけとなつた。

わたしの居場所はどこにもなかつたが、わたしは満足していた。

(義務を果たしただけの人生だった。しかし一切の後悔はない、幸福な人生だった)

わたしはするべき事を完遂した大いなる満足感を持つて、天へと昇つた。

わたしの死後、妹はわたしの墓石に言葉を添えてくれた。

『愛すべきパン職人ここに眠る。彼はイタリア人が果たすべき役割をすべて果たした、イタリアが誇りべきパン職人であつた』

それは褒めすぎだらうと、わたしは笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3003k/>

20世紀イタリアのパン屋さん（短編）

2011年8月25日18時54分発行